

第56回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展 日本館の提案

住友文彦

1) 提案コンセプト

ソリア・エ・リミテ
「 関 と 境 界 」

私たち一人ひとりにとって世界は、数えきれず、永遠で、多声的で、同時並行的で、円環的なものとして本来経験されるものですが、先進国に生きる多くの人は近代合理主義的な集中や管理のもとで生きています。それゆえにしばしば、個人の記憶や想像力、あるいは身体感覚や生理感覚が、うまく折り合いを付けられずに精神に葛藤や分裂をもたらします。

このことに私たちが差し迫った問題意識を感じるのは、自然の大いなる力やテクノロジーの発達がますます社会に影響を与え、生と死の境界、「私」という意識の一貫性、異文化間における歴史認識、人間と他の生命との共存、民主主義の可能性と限界、といった点をめぐって、近代化社会の行き詰まりを乗り越えるための思考が自由に動き回れる関（ソリア）を確保し、従来境界（リミテ）に揺さぶりをかける必要を強く感じるからです。

自然とテクノロジー

ヴェネチアは、生きた干潟の上に作られた人工の都市です。常に気候変動など自然の影響を受けるこの街で、数少ない陸地の自然があるカステッロ公園（ジャルディーニ）で、日本館の周辺環境を活かした展示を展開します。

また、人間が他者の視点で自分を見つめることや、記憶と記録のあいだを行き来するような経験は、間違いなくテクノロジーの発達をもたらしたものです。現代の多くの芸術家が映像表現に強い関心を示すのは、それ故のことであり、従来の芸術表現のみならず、哲学や美学に対しても重要な問題を投げかけています。

この二つは、人間の時間認識を超える長大な尺度や、意識の外側に置かれている領域を私たちに突きつけてくるものです。したがって、これらが西欧社会にとって日本文化を特徴付ける二つであるのは偶然ではなく、文明のあり方の

転換期における必然と言ってもいいのかもしれませんが。

2) 参加アーティストについて

近年の国際的なアートの変向として、生の個別性と個人的な感覚の差異に着目する表現に高い関心が向けられています。私たちの生を管理する仕組みに対して、さまざまな迂回、逸脱、中断、介入などの経験を芸術がもたらすことの可能性が注目されていると言えるでしょう。そうした観点から、パフォーマンスやそれを記録する映像に対して新しい可能性を加え、その独自性を高く評価されているアーティストとして高山明と小泉明郎に参加してもらいます。

高山は、日本館のピロティ（半分外側/半分内側とも言える空間）に「ツアー・パフォーマンス」に参加するための出発点を作ります。参加者は、まず積み上げられた地図を手にとり、地図に書かれた「指示」をもとに日本館の周辺を歩き回ることになります。そこは仮想的につくりあげられた空間「人工の楽園」であり、日本館はそこに浮かぶ「島」に見立てられます。ここでは、動物に付けた超小型カメラで撮影された自然の映像が見られる仕掛けがあり、参加者は鳥や動物や海中生物といった複数の生き物たちの視線から見た世界と出会います。あらゆる可能性をもった脱人間的な知覚世界との出会いは、日頃慣れ親しんでいる統合的な感覚を揺さぶり、それは眼にする物たちが分裂したまま均衡して存在している、と感じられるような感覚の解放をもたらします。

映像制作には、「バイオロギング」の技術を用います。「バイオロギング」とは、動物に超小型のビデオカメラやセンサーをつけて行動や生態を調べる動物生態学の研究手法で、日本が最先端の科学分野です。動物生態学の研究者、超小型カメラの開発者、自然と人間の関係を探求する思想家などとプロジェクトチームを作り、自然と技術との関係、人間による自然への介入などをめぐりリサーチをおこないながら作品制作を進めていく予定です。

小泉は、館内に2種類の作品を設置します。ひとつ目の作品は何気ない家族の会話のように見える場面設定です。しかし、はじめに見る大画面モニターでは発話が間延びしていて観客は聞き取ろうとしても分からないはずですが、さらに別の投影画面を見ると会話のやりとりが分かるのですが、映像が早回しにな

っているため長い時間があったという間に過ぎ去っていることが分かります。そして、その会話は不在の誰かを含むものになっていることにも気付きます。

もうひとつの作品は、過去を思い出しながら語ろうとする記憶障害を抱えた人の姿を映し出します。しかし、その話は時間軸が定まらず、前後関係や整合性がとれないものにしか聞こえません。そのあとで、その話をもとになるべく正確に本人と役者が一緒に話の内容を演じる映像を見てもらうこととなります。誰かにとって意味をとれない物語が、発話者にとってその人格を支える記憶になっていることに気付くような作品です。

二人の作品は、世界を見る主体（＝人間）を作り上げてきた近代の制度を別の角度（人間以外の生き物や記憶障害者）から眺めることで、私たちの生を集中的な〈時間〉の管理から解放し、もっと多視点的なものへと開いていく点で共通しています。そのため両者の作品を連続して体験することで、映像を集中して見たり、自然を歩いたり、集中と散漫の間を行き来してもらうことで、すべての作品がつくりあげる空間全体で「闕（敷居）」と「境界（限界）」に遭遇するような設定になっています。

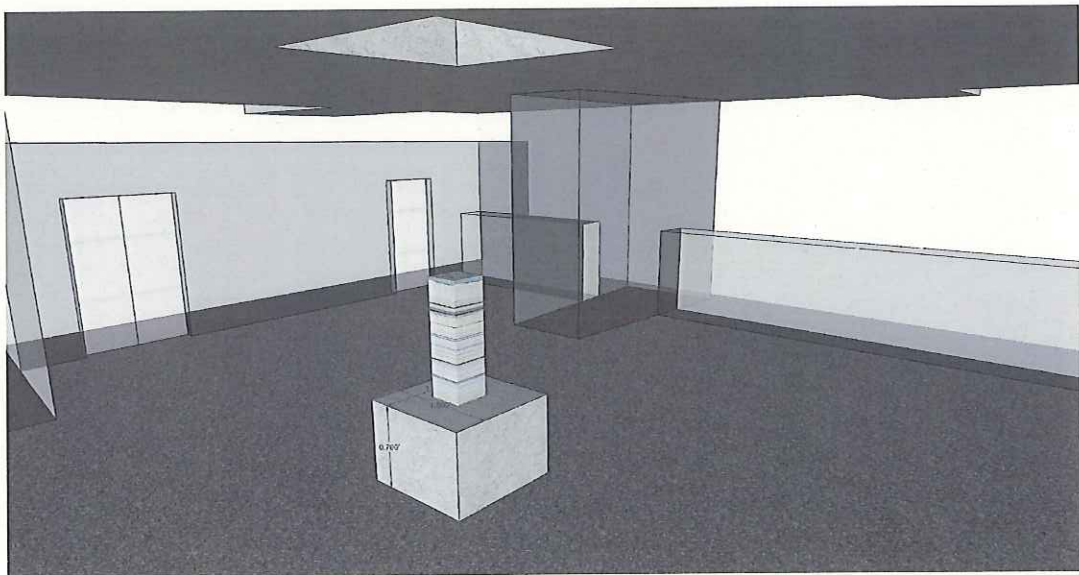
同ビエンナーレ日本館で展示するアーティストは過去の選考において、若手から中堅のアーティストを選ぶことがすでに共有されています。高山と小泉は共に日本を活動拠点にしつつもヨーロッパでの活動もおこない、これから同時代の国際的なアートの動向においてその独自の作品の位置づけを獲得していく可能性が大いに期待できるアーティストです。ヴェネチア・ビエンナーレという祝祭的な祭典において、今の社会に生きる私たちの多くが関心を共有できる問題を投げかけ、かつ他にはない独自性によって注目を向けさせることができる作品を展示できるはずと考えています。

3) 展示イメージ

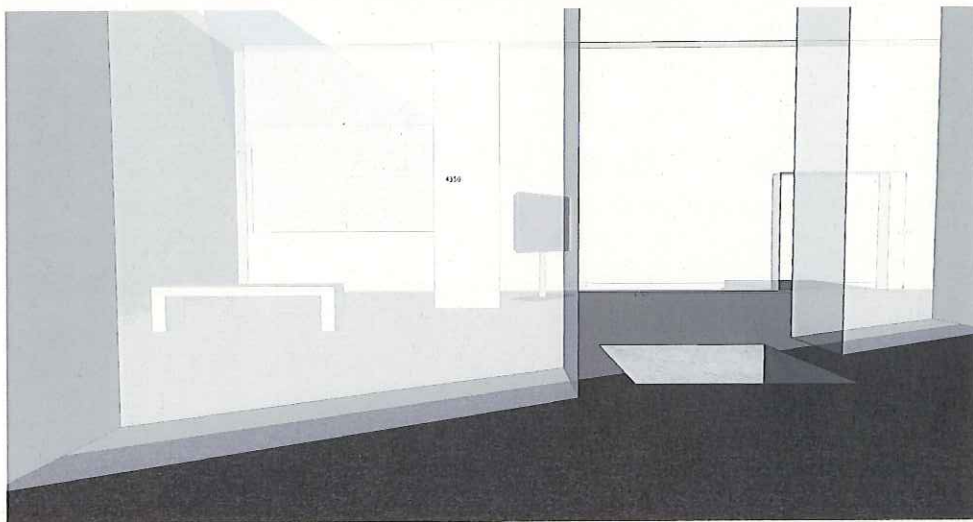
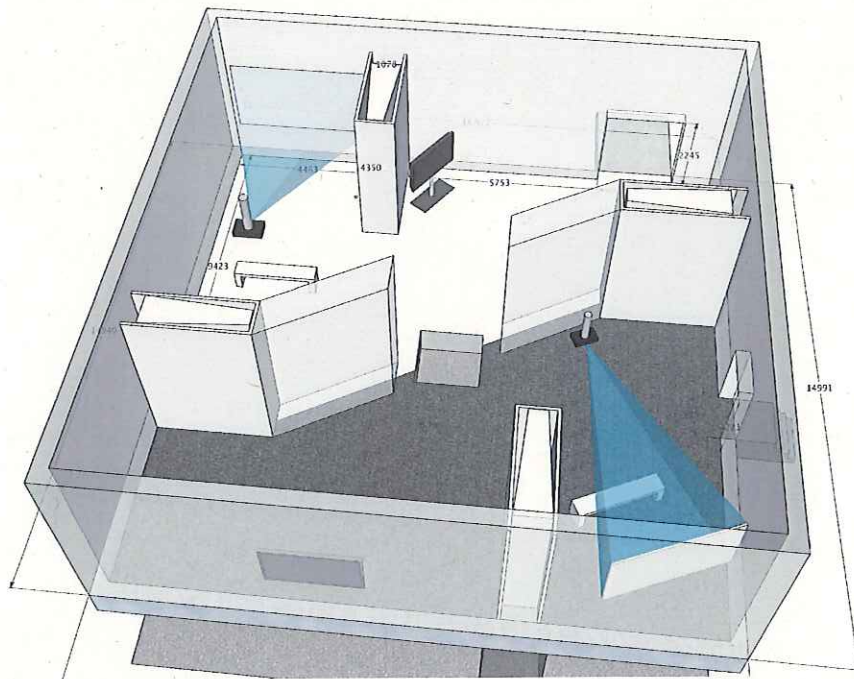
◎日本館のピロティと館内、そして周辺環境も活用する展示プラン



高山明：ピロティ部分がツアーの出発点となる。そこで観客は積み上げられた「地図」を手にとることで作品に参加する。その後、周囲の木々のなかを歩き回り、書かれた指示をもとにいくつかの映像と実在する建物や自然を眼にする。



小泉明郎：館内は仮設壁で隔てられているが、時間と記憶をテーマにする二つの作品の間を行き来できるようになっている。完全な暗闇は作らないが、暗くした空間と明るさを保った空間の違いによってコントラストをつくる。高山の作品に参加すること、異なる映像作品の間を移動することを意識した空間づくりをおこなう。



4) 予算案

関係者旅費	300 万円
作品制作費	400 万円
作品輸送（保険料込）	250 万円
会場施工費	700 万円
機材レンタル代	400 万円
現地管理運営費	1000 万円
カタログ作製費	300 万円
広報費	300 万円
そのほか	100 万円
合計	3750 万円

5) 応募者略歴及び出展作家略歴と参考作品図版

応募者：住友文彦（すみとも ふみひこ）

1971年 埼玉県生まれ

1999年 東京大学総合文化研究科表象文化論コース修了

2000年 金沢21世紀美術館建設事務局学芸員

2004年 NTTインターコミュニケーションセンター学芸員

2006年 東京都現代美術館学芸員

2010年 「前橋市における美術館構想」学芸員

2013年 アーツ前橋館長

主な企画した展覧会

2005年 「Possible Futures：アート&テクノロジーの過去と未来」展（NTT
インターコミュニケーションセンター）

2007年 「美麗新世界」展（北京/広州、国際交流基金）

2008年 「川俣正[通路]」展（東京都現代美術館）

2009年 ヨコハマ国際映像祭（BankART NYKほか）

2010年 Media City Seoul 2010（ソウル市美術館）

2013年 あいちトリエンナーレ 2013

参加作家：高山明（たかやま あきら）

1969年 埼玉県生まれ

1993年 早稲田大学第一文学部中退

1994-98年 ドイツの様々な劇団、劇場で演出助手および演出

1998年 日本に帰国し演劇活動

2002年 演劇&パフォーマンスユニット Port B（ポルト・ビー）創設

主な作品

2003年 『プレヒト的プレヒト演劇祭における10月1日/2日の約1時間20分』（シアターX）

2004年 『Museum: Zero Hour ～J.L.ボルヘスと都市の記憶～』（シアターX）

2005年 『Re:Re:Re: place ～隅田川と古隅田川の行方（不明）～』（アサヒ・アートスクア）

2006年 E.シュレーフ作『ニーチェ』演出（BankART NYK ホール）

2006年 ツアー・パフォーマンス『一方通行路 ～サルタヒコへの旅～』（巣鴨地蔵通商店街）

2008年 ツアー・パフォーマンス『サンシャイン62』（池袋周辺地域）

2008年 インスタレーション『荒地』（旧豊島区立中央図書館）

2008年 インスタレーション『東西南北』（旧ソウル駅、「プラットフォーム」展）

2010年 『完全避難マニュアル 東京版』（フェスティバル/トーキョー10）

2010年 『個室都市 京都』（京都国際舞台芸術祭）

2011年 『国民投票プロジェクト』（フェスティバル/トーキョー11）

2013年 『東京ヘテロトピア』（フェスティバル/トーキョー13）

主な出版物

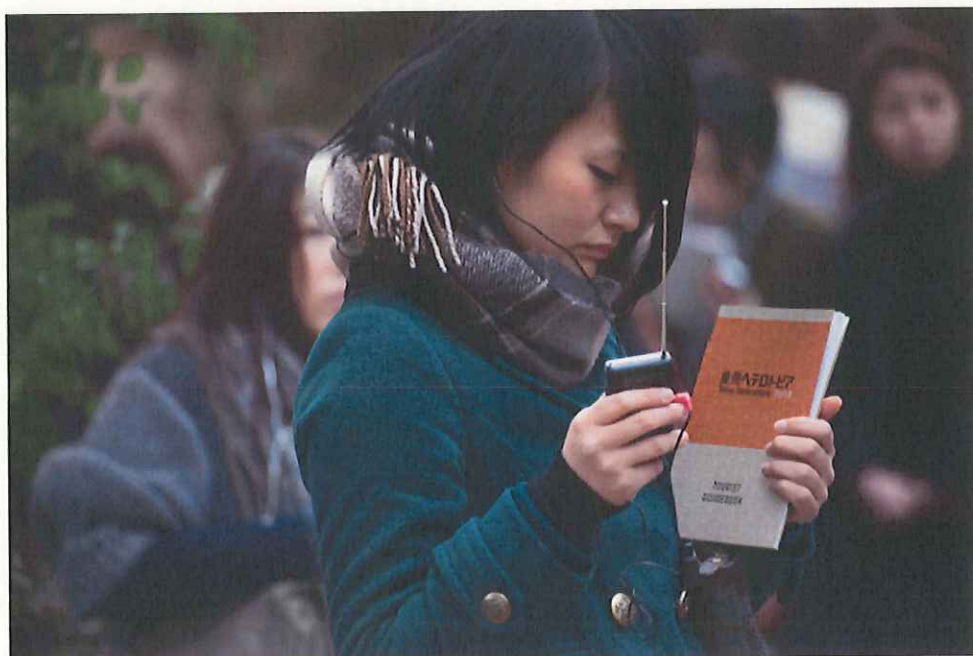
『「個室都市 東京」ドキュメント』（Port B, 2010年）

『はじまりの対話』（思潮社・現代詩手帖別冊, 2012年）

『東京ヘテロトピア』（新潮 2014年2月号所収）



ツアー・パフォーマンス《サンシャイン62》(池袋周辺地域)



《東京ヘテロトピア》(フェスティバル/トーキョー13)

参加作家：小泉明郎（こいずみ めいろう）

1976年群馬県生まれ。現在は横浜市在住。

1999年国際基督教大学卒業

2002年ロンドン大学チェルシー・カレッジ卒業

2005-6年オランダ・アムステルダムのアイクスアカデミーにて二年間制作活動を行う。またその間、文化庁新進芸術家海外留学制度より助成を受ける。

主な個展

2009年 「MAMプロジェクト009：小泉明郎」（森美術館）

2010年 「トータル・エクスタシー」（アネット・ゲリンク・ギャラリー、アムステルダム）

2011年 「傷ついた英雄の美しい午後」（アートスペース、シドニー）

2013年 「プロジェクト・シリーズ 99：小泉明郎」（ニューヨーク近代美術館）

主なグループ展

2002年 「ニュー・コンテンポラリーズ 2002」（リバプール・ビエンナーレ、バービカン・カーヴ、ロンドン）

2007年 「アート・サマー・ユニヴァーシティ」（テイトモダン [スクリーニング・イベント]）

2008年 「南京トリエンナーレリフレクティブ・アジア」（南京博物院）

2010年 「レゾナンス」（サントリーミュージアム天保山）
「第1回愛知トリエンナーレ」

2011年 「インビジブル・メモリー」（原美術館）

2012年 「Omnilogue: Journey to the West 展」（国際交流基金、ラリット・カラ・アカデミー、ニューデリー）

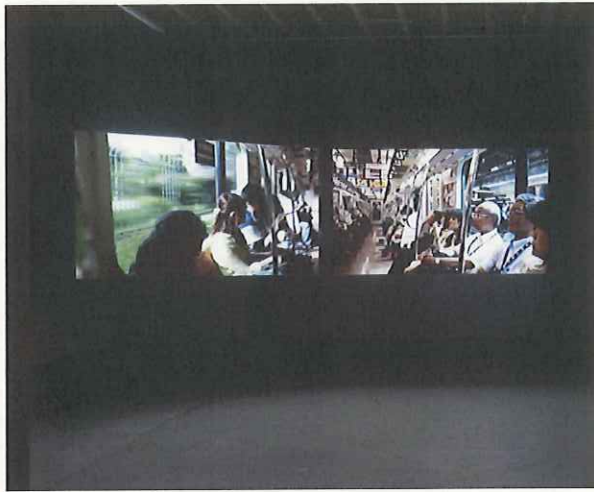
「フューチャー・ジェネレーション・アート・プライズ」（ピンチュック・アート・センター、キエフ）

「第15回アジア美術バングラディッシュ・ビエンナーレ2012」

2013年 「六本木クロッシング2013ー来るべき風景のために」（森美術館）

「日産アートアワード」（BankART NYK）

「ナウ・ジャパン」（KAde アムステルフォート市美術館、オランダ）



《劇場は美しい午後の夢を見る》



《記憶術（父親）》



《もうひとつの視覚》